

感想文

大泉生協病院 リハビリテーション科 理学療法士 秋野ひかる

(1)カンファレンス全体の報告と感想

カンファレンス会場は大きく、分科会の小さな会議室には、それぞれゆったりとしたソファやバランスボールがおいてあり、インテリアも落ち着いたもので、全体的に会議の進み方も合間の催しものも温かみのあるものでした。

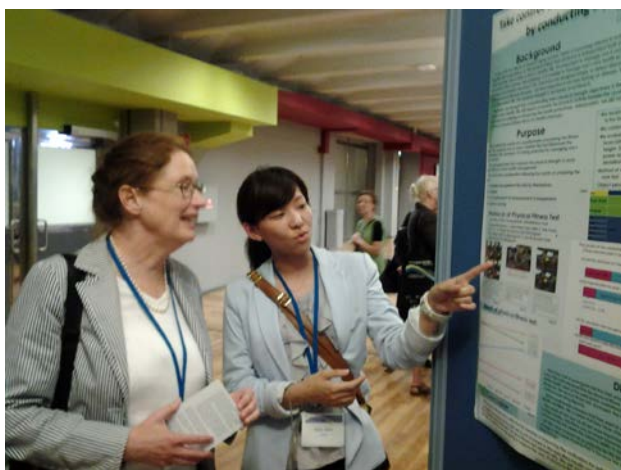
今回の会議のテーマは「Body and Mind」で、心と体の関係について捉えた発表が多くありました。印象に残っているものをいくつか挙げると、まず移民の健康ついてでした。普段関わる内容ではありませんが、言語的コミュニケーションにバリアがあることや、文化的なプライドがもてないこと、患者さんとして診断を受ける時に深刻な問題となることなどの話がありました。他に精神的な健康が、身体的な健康に影響を及ぼすという考えの発表や、ペインマネジメントについての話では、痛みを無くすのではなく、ペインフリーを目指し、様々な痛みスケールの話が聞けました。

リハビリに関わる内容では、病院での取り組みとして、早期に動作を確認し、ベッドサイドボランティアとして患者さんの歩行介助を行なうスタッフをつけ、スタッフの研修もしっかりと行い、患者さんの動作レベルが改善したという内容ものが印象に残っています。取り組みの結果、ニーズが会話で飛び交うようになったとのことが興味深く感じました。

(2)自分の発表の報告と感想

私達リハビリテーション科は、「Take control of our own health by conducting a physical fitness test」という題名でポスター発表を行いました。ヘルスチャレンジの期間を利用して、期間中の最初と最後の計2回、体力測定を行い、自分の体力を客観的に把握することで、自分の健康づくりのモチベーションを維持・向上してもらいたいと考え、研究を行いました。

ポスター発表の時間は30分で、最初の20分は、ポスターの前を通り過ぎる人はいましたが、足を止めてくれる人はいませんでした。その間、菊池さんがずっと傍にいて下さり、他のポスターを見て、感想や改善点を話し合っていました。そんな時、千鳥病院の有馬先生のポスターを見終わったターネセンさんが通りがかりに私たちのポスターも見て下さいました。



一瞬、頭が真っ白になり、何を伝えればよいか戸惑いましたが、体力測定を2回行ったことや、測定内容を実演しつつ説明しました。ターネセンさんは、「とても価値のあることね」と、コメントを下さいました。また、一つ一つの体力測定の結果を表すグラフに注目し、改善した項目があったことについても注目して下さいました。

その後、一人の参加者が興味を持って下さり、私たちがシンプルに体力測定のみ介入としたことを説明すると、彼女は、興味深い話をしてく

れました。それは、アルコール依存の患者さんに対するセラピーでも同じような方法をとることがある、ということでした。とても良い視点だと褒めて下さり、今までの疲労が吹き飛ぶ思いでした。それ以上に、未熟な研究内容でしたが、まとめる作業をし、発表をする、意見を交わす、このことが研究の醍醐味なのだと、身をもって感じることができました。この経験が、今回私が会議に参加させてもらった中で一番の収穫でした。

(3)ターネセン CEO との懇親会の報告

ターネセンさんは挨拶で、日本にHPHのネットワークが作られること期待しており、そこへの援助は惜しまないとお話になりました。

食事中は、斎藤院長夫妻がターネセンさんとお話になり、私は緊張して話かけることはできませんでしたが、斎藤先生の奥様が質問されたことに対して、ターネセンさんが答えた内容が心に残っています。先生は、外科医として働いていましたが、手術をして一人で助けられる人数は限られている。しかしHPHで多くの人を助ける事が出来ると思ったとのことでした。

(4)全日本民意連の仲間との交流の報告

羽田さんや伊藤先生が、私のポスター発表の際に何度かポスターの前を通り掛って下さったり、ポスター発表後に数人の人達が私たちのポスターを見ながら、指差しながら、話していたことを伝えて下さったりし、とても嬉しく感じました。

懇親会などでも、気軽に声を掛けて下さる方が多く、とても有難く感じました。先生たちと研究についても話すことができ、とても貴重な時間となりました。



(5)旅行中のエピソード

菊池さんが働き盛りの頃の話、成田空港までの道すがら、また、食事の際など聞くことができ、とても勉強になったという思い出があります。

また、イエテボリは、トラムという路面電車が発達しており、どこに行くにも便利でした。ほとんど代表団で一緒に行動していましたが、トラムは行き先がスウェーデン語で書かれており、どれも分かり難いこともあって、毎回、反対方向に乗っては、乗り間違いに気づき、乗り換えるというのが恒例となっていたのが面白かったです。

菊池さんが時差に合わせて時計を調整せずに、感覚で動いていらっやっったとすることに、大変驚きました。

(6)最後に…

カンパをしてくださったり、応援してくれた組合員の皆さん、職員の皆さん、リハ科の皆さん、このような機会を与えて下さり、ありがとうございました。

以上